

小美術館と工房巡り たなか踏基

あれは確か、彫刻家の高校の級友の高嶋文彦君をモデルにした安曇野舞台の作品「奇妙な猫たち」の初校ゲラの修正稿を文芸社編集部に戻送し、再校ゲラと表紙案を待っていた頃であろうか。

十月十三日、「えぞつづみ元同人でネット仲間のアングルと高橋昭一君から、電話の誘いがに入った。『豊田市から来るシヤナビのメンバーと、安曇野でオフ会をするが、参加しに来ないか?』」

高橋君には、同著執筆の際、七月の現地取材では大変世話になっていた。安曇野と聞いて誘惑に駆られたが、即答を避けた。とつのも、第二弾出版の最終段階だったので、後の作業を心配したからである。でも翌日、彼のメール案内をみて、一泊二日のオフ会に同道する旨の返事をした。

豊田市からのメンバーは、同じシヤナビ所属であるが、BBSの遣り取りで安曇野案内を請われた由電話で話したが顔は知らないとのこと。開設しているHPを参考にして欲しいとつ文面であった。

今回の安曇野巡り最大の収穫は、今迄訪れたこともない「大熊美術館」と二つの工房であった。

通常の安曇野巡りと言えば、ちひろ美術館や緑山館、硝子工芸品のアートヒルズ、大王わさび農園等の観光ルートの有名所巡りがせいせいであるが、今回は友案内で新たな発見をしたのである。

世界最古の王室を誇り、童話の父アンデルセンの故郷であるデンマーク。そこに世界的な陶器ブランドのロイヤル・コペンハーゲン陶磁器があるという。雑木林の道を曲がり、安曇野文庫という喫

茶店に隣接して「大熊美術館」があった。入場料は八百円であったが、支払おうとすると誰も居ない。ベルを押し待つこと五分。悠長な安曇野の気が漂つ中「すみませー!かた付けものをしていて、気品ある白髪の婦人が登場した。

私設の同美術館の約五百点を越える所蔵品は正に見事の一言で、膨大なロイヤル・コペンハーゲン陶磁器のコレクションであった。その部屋は二室あって、一つは独特のプレート類を飾る青の陶磁器の部屋、もう一つは十八世紀の銅板植物図鑑を元絵にして描いた彩色の皿、歴史の部屋であった。青の磁器と言えば、中国宋の時代や日本の伊万里焼の青磁の垂や茶道具を観たことがあるが、そうした青と一味異なる、クリスマス行事をデザインした、プレートや人物や動物の置物類であった。

ロイヤル・コペンハーゲン窯は一七七五年にデンマークの王室のジュリアン・マリー皇太后の援助の下に創設され、王国とその領地内で使用される陶磁器を制作する特権を有していたといふ。言わば、デンマーク王室御用達の窯業場である。同館で、更に美術館所蔵の東山魁夷の初期の作品(本名東山新吉鑑賞までできたのである。「北欧紀行」リトグラフ等、およそ東山魁夷の「赤富士」等晩年の作品とは似ても似つかぬ貴重な作品に触れることができた。

この美術館のオーナーは、一体どうゆう素性の人であろうかと、思いを巡らしながら、再度気品ある白髪の婦人から話しを請うた。婦人は嫌な顔一つせず、隣の喫茶店から態々姿を現し、我々素人の為に時間を掛けて解説までしてくれたのである。

初めて訪れた安曇野の山麓線沿いにある、ピンサンチ、夢工房、この二つの独特の工房にも惹かれるものがあった。山麓線とは、安曇野の西側の

風情のある雑木林に囲まれた道だった。

先ずピンサンチとは、北山敏(ミチ) 卓苗(タカノ)の夫婦二人が自宅で始めた、元々コペンハーゲングラフィックCCGのアトリ工房であるといふ。開館は土日・祭日であったが、婦人が卓議に当選したことにより、日曜日しか開館できなくなった由。動向の女性陣を釘付けにした、アクセサリーや工芸小物類もさることながら、森のアトリエと称する、流木で作った置物のある散歩道に、夫婦二人の生活振りが偲ばれた。▲森に一人だけで住んで喧嘩しないのだから? 動向女性陣は、日頃の我家の生活を思いをはせながら心配し、口々に疑問を呈していた。

次の夢工房バードソングは、岐阜県生まれのイラストレイタ小林千登志が安曇野に移り住んで始めた、森の野鳥や小動物のカービングの工房であった。小林オーナーは、ハイポッターの映画や本のイメージが日本に到来する前から、梟(コウモリ)のシリーズ作品を沢山手掛けていた。髭がお似合いで、本人を模した人形が傍らに置いてあった。

雄大な北アルプスの山麓、安曇野には沢山のものをつくる人が暮らしている。アートクラフトマンで構成する、独特の安曇野スタイルが、山麓線沿いに誕生している。これ等の工房に関与する人々は必ずしも、安曇野生まれの人ではない。何かの機会で、ここを訪れて安曇野の良さに惹かれて定住の地に定めた人々も少なくない聞く。

今回の「えぞつづみ元同人の友が誘って、車で案内してくれたオフ会は、池田町大嶺高原の紅葉する大楓にも出会えた新たな発見の旅であった。

泊まりは、燕岳の麓にある中房温泉から19キロもの距離を引き湯をしていた、「蔵」といつ穂高町の宿で総檜風呂を満喫した旅でもあった。